篠原一男の非住宅作品のスケッチにみる図形的特徴

奥山研究室　13_06824 篠原　彬（SHINOHARA, Akira）

1. 序　篠原一男は1954年に最初の建築作品を発表し、寡作ながらも独自の建築作品と建築理論を展開することで、戦後日本の建築界に大きな影響を与えた建築家である。住宅設計を中心に活動していた篠原であるが、1980年以降は国内外問わず大規模な非住宅作品も手がけており、それらのスケッチが多く残されている。これらのスケッチに描かれた多様な図形からは、新たな建築の形を掴みとろうとする篠原の検討の痕跡を窺うことができる。そこで、本稿では非住宅作品のうち５０枚以上のスケッチが残っている７作品[1)]に着目し、それらの図形的特徴を捉えることで、篠原一男のかたちの創出方法の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 非住宅作品のスケッチの特徴

2-1. スケッチの枚数と特徴　作品ごとにスケッチに描かれた内容を作品ごとに確認し（図１）、スケッチの総数および平面図、立・断面図といった図の内容を表１に整理した[2)]。次に、スケッチを発表図と照らし合わせることで、**構想案が描かれたスケッチ、最終案が描かれたスケッチ**に分類し、表２にまとめた。その結果、「K2ビルディング」（作品K）、「ヘルシンキ現代美術館計画」（作品H）は構想案が描かれたスケッチが８割以上を占めており、「ホテルインユーラリール計画」（作品E）では最終案のスケッチが約８割を占めていた。また、「DOM本社屋計画」（作品D）、「日本浮世絵博物館」（作品N）、作品Eでは、構想案のスケッチにおいて立・断面図の割合が高く、平面図がほとんどみられなかったのに対し、作品Kでは構想案のスケッチにおける平面図の割合が高く、最終案のスケッチでは立・断面図の割合が高いという特徴が確認できた。

2-2. 構想案が描かれたスケッチ　構想案のスケッチには、図のかたちそのものを創り出そうとする検討が読み取れるものと、架構や開口といった建築的エレメントを用いて具体的な諸機能の配列が検討されているものがみられたため、これらを**抽象スケッチ**、**具体スケッチ**として分類した（表３）。実施作品に着目すると、Kと作品Tでは具体スケッチが多かったが、作品Nでは抽象スケッチが多くみられた。これは、非住宅作品における最初の実施作品である作品Nでは、建築を成立させる具体的な検討よりも、住宅作品ではできなかった様々なかたちの創出を試すことに比重が置かれていたのではないかと考えられる。

3. 抽象スケッチにみる図形的特徴　抽象スケッチには、単一の図形をもつ外形が描かれるもの（**単一図形**）と、複数の図形が描かれるもの（**複数図形**）が存在し、複数図形にはその形態的な関係において、**類似**するものと**異種**のものが位相的な関係において**並置**されるものと、**重合**されるものがみられた。そこで、これらのスケッチの図形的特徴を、中央に単一外形、外周に複数図形、それらの間に単一外形の中に複数図形を含むものをそれぞれ位置づけ、複数図形については縦軸に形態的関係、横軸に位相的関係を取り、各図形的特徴の関係性を図２に示した。まず、複数図形、および単一外形の中に複数図形を内包するものでは、類似する図形の並置が最も多くみられた。さらにこれらは、図形同士の状態として、**図形**

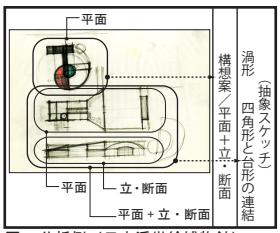

図1. 分析例（日本浮世絵博物館）
表1註）実作品では竣工年、計画作品では発表年を記載する。パースやアクソメ図、部分の検討がみられるスケッチと、平面か立・断面か判別不能なスケッチを「その他」として分類する。
表2註）最終案と構想案が同時に描かれている場合は、スケッチの大小や書き込みの度合いを考慮してどちらかに振り分けている。
表3註）抽象スケッチ数に併記する（）の中の数字は、重複したスケッチも含め、その総数を記している。

表1. 作品ごとのスケッチの種類（枚）

竣工年	作品名（略称）	スケッチ数 総数	平	立・断	平＋立・断	他
1980	DOM 本社屋計画 (D)	55	24	25	6	0
1982	日本浮世絵博物館 (N)	64	15	**34**	14	1
1987	東京工業大学 百年記念館 (T)	88	**59**	15	14	0
1990-92	ホテルイン ユーラリール計画 (E)	231	75	**130**	20	6
1990	K2 ビルディング (K)	183	**101**	60	11	11
1993	ヘルシンキ 現代美術館計画 (H)	160	47	47	**54**	12
1995	横浜国際客船 ターミナル計画 (Y)	56	11	**32**	13	0

表2. 構想案と最終案

構想案が描かれたスケッチ数 総数	平	立・断	平＋立・断	他	最終案が描かれたスケッチ数 総数	平	立・断	平＋立・断	他	最終案の判別（平面）	最終案の判別（立・断面）
10					45					外構の検討、または平面外形の一致	浮遊する直方体とその支持方法
28					36					平面外形の一致、外構の検討	図形パタンのある正方形が横１列に連なる立面
31					57					折れたシリンダーとボリュームの組み合わせ	ボリューム上部に貫入する半円のシリンダー
47					**184**					２本ずつ、計４本のコアで全体を吊る	カーブと図形の組み合わせ（第１・２期）、亀裂のはしる立面（第３期）
153					30					短手中央に通る動線と南北に付随する階段室	逆三角で分割された立面/ヴォイド部分の検討
146					14					対角線上に配置された立体とシリンダーの交差	浮遊する舟形の立体と下部のシリンダー
25					31					長方形の中に収まる平面	弓形の立体とその支持方法

表3. 抽象スケッチと具体スケッチの内訳

総数	抽象スケッチ	具体スケッチ
10	7 (12)	3
28	23 (31)	5
31	11(11)	20
47	37(62)	10
153	25(37)	118
146	111(83)	35
25	18(19)	7

の反復、斜交、対称な配置、矩形の連結、帯の重合、および、図形の形状として**渦形、波形、段々形**といった共通する図形的特徴のまとまりを見出すことができた。特に、図形の反復では多くの種類の図形がみられた。単一外形のみについては、円や菱形といった単純な幾何図形と、単純な幾何図形を組み合わせた複雑な図形がみられた。さらに、図形的特徴を作品ごとに確認したところ、作品Dと作品Nでは並置が多いのに対し、作品Hと作品Yは重合が多くみられた。作品Eと作品Kでは、単一の外形で並置のものが多く見られた。このことは、非住宅を手がけ始めた段階では同時期の住宅作品の検討と同様に、同じ図形を反復させて、かたちを創り出そうとしていたのに対し、作品Hと作品Yでは、様々な形態を重ね合わせてかたちを作り出そうという新たな試みが伺える。作品Tでは並置がみられる一方で、複数の図形の重層的な関係が、直行や斜行によって様々に試されていることから、この作品が篠原のかたちの創出の転換点であったと考えられる。さらに、作品Eと作品Kには、単一なかたちの検討により、都市に立ち現れる立面の検討が特徴的であり、都市的な状況の中で敷地条件が限定的であっても、見慣れた都市風景の中に突如現れるかたちを模索していたと考えられる。

4. 結

以上、非住宅作品のスケッチにみられる図形的特徴を、単一の外形が描かれるもの、複数の図形が描かれるもの、および複数の図形の形態的関係と位相的関係という水準から検討した。その結果、異なるかたちを組み合わせたり、図形を様々に重ね合わせたりすることで、複雑かつあたらしいかたちを創出していたという篠原一男の思考の一端を明らかにした。

註1）発表されている非住宅作品は全部で14作品あり、スケッチの総枚数は1045枚残されていた。本研究では、そのうちの7作品にあたる877枚を分析対象としている。

2）スケッチの形式的特徴については、A3のトレーシングペーパーが大半であった。また、スケッチブックなどの冊子も存在し、それらはホテルインユーラリール計画やヘルシンキ現代美術館計画に多く見られた。日付については記載が少なかった。

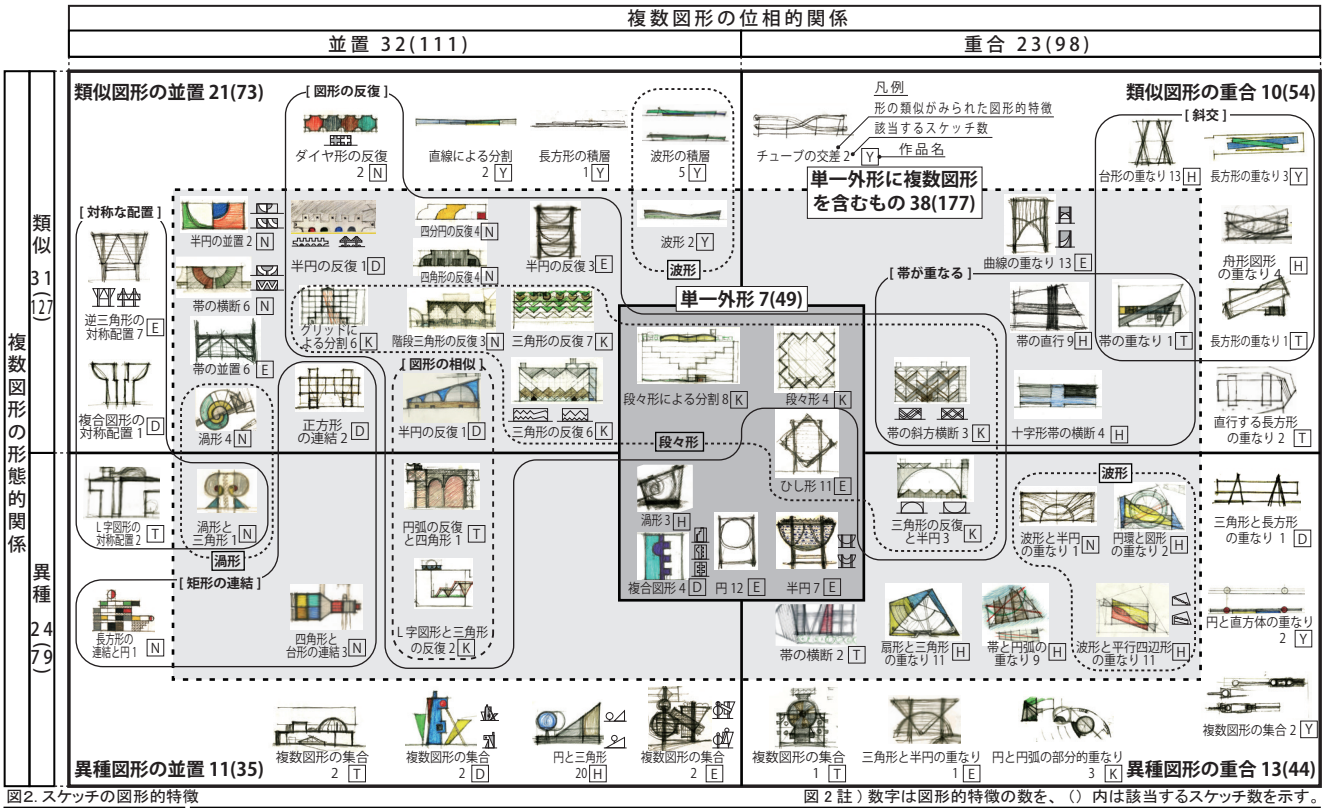

図2. スケッチの図形的特徴

図2註）数字は図形的特徴の数を、（）内は該当するスケッチ数を示す。

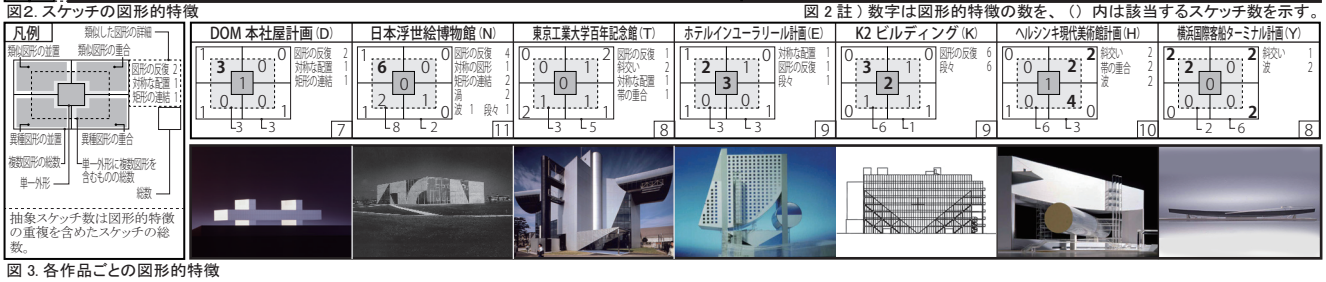

図3. 各作品ごとの図形的特徴